祭りの後に

零月　華夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
祭りの後に

【Ｎコード】
Ｎ０７５３Ｘ

【作者名】
零月　華夜

【あらすじ】
とある吸血鬼と少女……の話。

明日は国を挙げての祭典がある。
皆がお祭り騒ぎになる中、出会ってしまった二人による３日間という短いお話。

（多分）

元々短編にするつもりが、思ったより長くなりそうなので連載に……
な、なぜ！？
ヒロインちゃんが私の手に負えません！！

※更新は遅めです。

夜道を歩けば…

「……っは、はぁ、はぁ」

暗い裏路地にそれはいた。

ここはアテミスという名の小国の城下町である。
しかし、2、3年ほど前まで約60年ほど続いた戦争をしていた。
たくさんの犠牲を出した無益な戦争。
その名残で、城への大通り以外の街の道は要塞の様に複雑に絡み合い、長年住んでいても迷うほど入り組んでいる。
特にこの地域は戦の爪痕がひどく、人もほとんど住んでいない。
こういう場所にはあまり表で出来ないようなことをしたり、日を浴びれないものが集まることが多い。

「ぐっ……」

そこには、怪我をしている様子の人が……いや、吸血鬼がいた。

年は20代前半くらいの青年。長袖、長ズボンの黒ずくめで、おまけに髪まで黒いので、昼はともかく夜は闇にまぎれてしまっている。
目は鋭く、血を吸うという属性を現しているかのように深い深紅。
深紅の目には、深い闇と焦りが浮かんでいる。
その腕と脇腹に深い怪我をしているようだ。
そして、時折聞こえる喧騒から逃げるように複雑な道を当ても無く走り抜ける。

「っつ……げほ…げほっ……」

血を吐きながら逃げる。おそらく、もうそう長くは走れないだろう。
そして、意識が朦朧として、気を失いかけたころだった。
地面に倒れたときに、小さい人影を見た気がした。

・・・・・・・・・・・・

「ミネ、もう上がっていいわよ。」
恰幅のいいおかみさんがパンを持ってこちらに来た。
「はい。……これは？」

ここは城下町の大通りにあるパン屋である。
私と、おかみさんだけで経営しているパン屋で、小さいパン屋だが
割と人気があり、毎日忙しいが充実した日を送っている。
特に明日は国を挙げての式典があるので、その準備でいつも以上に
忙しかった。
やっと終わるころには、外はもう真っ暗で。

きっと皆、明日に向けて家でそれぞれの時間を過ごしているのだろう。
明日、ここがお祭り騒ぎになるとは想像もつかない静けさだ。

「ふぅ。」

さっき出てくるとき、パン屋のおかみさんがパンを持たせてくれた。
どうやら私の妹が祭りにいけないということで、少しでも祭りを味あわせてあげたいと言ってくれた。
おかみさんの温もりを感じて心が温かくなる。

「……暗い。早く帰らないと。」

でも私が今歩いている道は冷たくて。
もともと大通り以外は治安は悪いのだ。夜に歩くなんてかどわかして下さいと言っている様なもの。
特に女、子供は標的になりやすいので早く帰りたい。妹もきっと心配している。
仕方ないので、普段使うことのない近道を使う。

そして、それはもうすぐ家が見えるというところだった。

夜道を歩けば…（後書き）

前回とかなり変わってます。

コメントなど、ぜひよろしくお願いします。

出会い……？（前書き）

血が苦手な方はご注意。

出会い……？

「…何コレ？」

何かが道を塞いでいる。
いや、よく見ると人が倒れている。
というか唯でさえ暗いのに、黒ずくめなので気づきにくい。
……もう少しで転ぶところだったじゃないか。

「ねえ、…ねえってば。」

もしかしたら危ない人なのかもしてない。
しかし、倒れている人を放っておく訳にはいかない。
何度か揺すってみるが、起きる気配はまったくない。

「ね……って、これって…血？」

うつ伏せなので、顔が見えない。
それに、衛生上にもうつぶせはあまりよろしくないので、せめて仰向けにしようと反対側の肩に手をかけると、どろり、とした感触が手のひらを伝わる。
暗くてよく見えないが、薄く香る鉄臭さと触った感触から血だろうと思う。

「どうしよう！！」

見捨てるわけにも行かず、怪我をしている様子から、いったん家に連れ帰ろうかと考えた時だった。

近くで複数の足音がする。それに混じって物騒な叫び声も。

「っつ、こんなときに！」

こんな所に倒れていては、格好の餌食だろう。
早く移動しなければ、最悪殺される。

「〜〜〜重っ！！」

さすがに男性を軽々担ぐことは出来ない。
しかたなく、引きずって物陰に移動させる。これでとりあえずは隠れられるだろう。
そして、私は五感を総動員させて人のいる方へと行く。

どうやら、廃屋の中にいるようだった。
どこかの金持ちの家だったのか、無駄に広くて隠れる場所がないので、会話が聞こえる距離まで近づくことが出来ない。
とりあえず出来るだけ近い物陰に隠れて、様子を窺う。

「……いたか？」

「いや、こっち…ない。そ……」

「……どこい……さがし…」

距離があるせいでうまく聞き取れない。

「はや……ないと。吸血鬼が……」

そこまで聞いて、意識が思考へと向く。

「吸血…鬼？」

何故あんな三流以下のような者が吸血鬼を探しているのだろう。
あれは確か国で一級の手配を受けていたはずだ。
国有数の能力の持ち主も手を焼いているというのに。

「ドルジナス卿……闇社会……」

「……なるほどね。こいつら、貴族の飼い犬か。」

おそらく金持ちの誰かに依頼でもされたのだろう。そこまで考えたところで、私は姿を表す。

「だ、だれだ！　　！？ぐあっ」

最初に気づいたひょろ長い男の首を折る。

「さあ、いったい誰だろうね？」

私は小首をかしげ……
血の噴水を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0753x/

祭りの後に

2011年12月16日19時51分発行